

土肥 歩 著

## 華南中國の近代とキリスト教

倉 田 明 子

本書は、筆者の言を借りれば、中國キリスト教史における「從來の『排外』『受容』『近代化』といった研究アプローチを相対化するために、個別地域におけるキリスト教傳道に目を向け、同時代の人びとがキリスト教と結んだ多様な關係について論證」しようとしたものである（二頁）。

本書の構成は以下のようになっている。

序章 近代中國におけるキリスト教史をいかに論じるか

第一部 キリスト教傳道と華南の人々

第一章 廣州格致書院の創設と地域社會

第二章 清末在外中國人と中國キリスト教傳道事業 —— 廣州鄉村傳道團と在オタゴ華僑

第二部 中國人キリスト教界による募金活動

第三章 嶺南大學による南洋募金活動

第四章 牧師招觀海の「南捐」 —— 南洋華僑による惠愛堂への募金

### 第三部 「梁發」をめぐる歴史敘述

#### 第五章 「梁發傳」についての考察

#### 第六章 梁發の「發見」——中華民国期における太平天國敘述とキリスト教

#### 終章 中國近代史研究における地域社會とキリスト教

#### 附録 『基督教中國第一宣教師梁發先生傳』全文

まず、各章の概要をまとめておこう。

序章では本書の目的、先行研究整理と課題、研究方法と利用史料、本書の構成、の四点について述べる。本書の目的は、これまでのキリスト教史の敘述では「傍流」にあった人々、すなわち「これまで中國キリスト教史で語られてこなかった信者および非信者層」に着目することで、宗教の歴史が他分野の研究者にも利用可能な歴史敘述であると示すことにあるとされている。そして先行研究を「回顧」・「通史」型、「排外」型、「近代化」型、「受容」型の四つに分類して整理し、これらの問題点を挙げたうえで新たな研究方法として「地域史」アプローチを提示する。さらに本書ではこの「地域史」アプローチを採り、廣州府およびその周邊の郷村を主な対象地域としつつ、この地域と外界を行き來した華僑にも目を向けるとしている。またキリスト教傳道史を論じるものの、本書では信者だけでなく非信者層も含めた議論を行うとしている。

第一部は一九世紀後半から二〇世紀初頭を射程に、廣州と周邊地域でのキリスト教布教と地域社會の非信者層との關わりを検證する。

第一章では、アメリカ長老會ミッションが主導し一八八八年三月に開校した廣州格致書院に焦點を當てる。同ミッションの布教活動を通して浮上した高等教育機關設立への動きと、廣州の地元の紳士たちによる格致書院設立の嘆願書の提出という二つの方向から同書院設立の過程を検證する。前者については、在廣東宣教師の間では一八六〇年代末から高等教

育機關設立の要望が何度か出されてきており、その背景には一八七〇年代に始まった同會の廣州近郊での内地布教の實績があつたことを指摘する。後者については、嘆願書の内容や提出者についての分析を通して、翰林院在籍者や舉人、善堂關係者などを含む數百名規模の嘆願者の一端を明らかにする。また彼らが西洋式の高等教育機關設立をアメリカ長老教會の宣教師たちに求めた背景として、清佛戰爭によって引き起こされたエリートたちの危機感があつたと分析する。

第二章では、キリスト教信仰の有無を問わず「教會や宣教師の活動に參與・協力する」人々の状態を教會への「支持」と定義し、この「支持」の具體的事例としてニュージールランドで組織された「廣州鄉村傳道團(CVM)」の宣教師による金銭および私信の送付事業を取り上げる。まずCVM發足の契機となつたオタゴ入植地の中國人移民へのキリスト教布教から説き起こし、CVM發足の経緯および金銭・私信送付事業を含む活動の内容について詳述する。そして宣教師によってまとめられた、送付事業に關つた中國人のリストに基づき、この活動を「支持」したオタゴ華僑を分析し、この事業が入植地と出身地の廣東省を結んでいた既存のネットワークの代替として機能してたと指摘する。

第二部は二〇世紀初頭から一九三〇年代初めにかけて行われた、二つの「南洋」華僑を對象とした募金活動を取りあげる。

第三章では、第一章で取り上げた廣州格致書院の後身である嶺南大學で一九一〇年代に行われた、華僑學校創設と運営資金調達のための募金活動について分析する。まず募金活動を中心的に擔つた鍾榮光の経歴を明らかにしたうえで、募金活動の背景や具體的な方法、協力者などについて詳述する。そしてこの募金活動が富裕な華僑商人からの寄付を受けることができた要因として、嶺南大學はもともと教派色が薄く、また募金活動においてもキリスト教色を前面に出さなかつたこと、また華僑商人の側も教育への熱意が高かつたこと、を擧げている。さらに當時北京政府が進めていた華僑への教育政策とこの募金活動が競合的な關係にあつた可能性を指摘している。また、中國のナショナルリズムが高まる時勢のなか、キリスト教の背景を持つ嶺南大學をめぐってその存在が「國恥」か否か、という議論も起こっていたことも明らかにして

いる。

第四章では、廣州でロンドン傳道會の管理のもとに設立され、一九〇六年に「自立」した教會叢柱堂の新會堂（「惠愛堂」）建設のために行われた募金活動（一九二七―一九三〇）を取り上げる。まず、この募金活動で中心的役割を果たした牧師の招觀海について、その経歴や反キリスト教運動に對する反論などについて紹介し、またそのなかで彼がしばしばキリスト教と辛亥革命を強く結びつける言論をしていたことを指摘する。そしてこの募金活動は、當時のキリスト教會では社會貢獻への關心が高まりつつあったことを背景に、禮拜堂とともに平民醫院や平民學校を建設することを目的としたとする。いっぽう招觀海の知名度の低さや南洋のキリスト教徒の少なさ、反キリスト教運動の影響など、募金活動にはいくつかの困難も伴ったが、南洋華僑からは政情不安による宣教師の退去という當時の廣州や中國全體の状況や、廣州暴動による被害者の救済といった觀點からこの活動が理解されていたと指摘する。そして嶺南大學やその關聯教育機關の同窓生や現地のキリスト教徒、富裕な華僑などからの援助を受けていたこと、また第三章で扱った嶺南大學のための募金活動との聯續性もあることを指摘している。

第三部では、一九二〇年代から一九三〇年代の中華民國において再「發見」された梁發というキリスト教徒をめぐる論争がテーマとなる。筆者によれば、廣東の教會では辛亥革命後、周縁的地位にあったキリスト教を中國の歴史の本流に位置づけようとする動きが起きており、梁發をめぐる一聯の動きはその具體的な現れだった、とされる。

第五章は、ニュージールランド長老會の宣教師マクニールが著した『梁發傳』に對する書誌學的研究である。この傳記はマクニールが一九二〇年代から英語で書き始めていたものであるが、中國人譯者による「翻譯版」のほうに一九三〇年に出版され、さらに文言の異なる中國語版が二種出版された後、一九三四年になって英語版が出版されるといふ複雑な出版経緯を持つ。本章ではこうした出版経緯の詳細に加え、マクニールおよび翻譯者の胡簪雲の経歴、また中國語の版本文言の異同や英語版と中國語版の内容の相違について述べられている。特に英語版の刊行時にマクニールが梁

發の出生地などの情報について新たな調査を行い、加筆していたことも明らかにしている。いっぽう内容的には、梁發の傳道活動については肯定的な評價が概ね共通しているものの、太平天國への評價においては中國語の異なる版本の間でも、また英語版と中國語版の間でも違いが見られるとする。特に廣東の中國人信徒の間で太平天國を高く評價する傾向があったのに對し、マクニールは太平天國の民族革命としての評價には距離を置いていたことを指摘する。

第六章は、梁發が民國期になってどのように「發見」され、評價されていたかを明らかにし、さらにそれが一九三〇年代以降の中華民國の政治的・社會的變化にもなつて太平天國と結びついた梁發評價へと展開してゆく様子を検討する。二〇世紀初頭から民國初期にかけて、廣東、香港、マカオ一帯のキリスト教會では過去のキリスト者の「偉人」の發見が相次いでおり、その中のひとりとして梁發についても、その子孫や縁者の努力によつて注目が集まるようになっていったという。すなわち、中國人最初の信徒は誰かをめぐる論争のなかで、梁發の曾孫を妻に持つ馮炎公の發言が注目を浴びたのが梁發の「發見」の端緒となつたとされる。また彼の盡力で梁發の墓が嶺南大學の敷地内で發見され、移轉された経緯も明らかにされる。いっぽう、太平天國に参加したキリスト教徒の子孫で牧師の張祝齡によつて梁發の著した『勸世良言』が太平天國に影響を與えた、とする言説がさかんに主張され、これが太平天國を辛亥革命と結びつけた孫文の主張とあいまってキリスト教史を革命史のなかに位置づける契機になつたとする。

最後に終章では、各章について論點をまとめたうえで、全體の結論として、地域の人々とキリスト教との關係性を「協力」「支持」「働きかけ」というキーワードで整理する。一九世紀のキリスト教傳道においては「排外」と「受容」に回収されない非信徒との「協力」や「支持」があり、また募金活動からはキリスト教界から一般社會への「働きかけ」を讀み取ることができる、という。また梁發の「發見」をめぐるのは、そこに廣東の人々のなかに地方文化（ここでは廣東の文化・歴史）と國家（ここでは中華民國）を「同根同源」とみなせうとする熱心な動きがあつたと指摘している。

また、附録として一九二〇年頃に發行された『基督教中國第一宣教師梁發先生傳』を翻刻し、全文を収録している。一

九二〇年代當時の梁發理解（ないし梁發「發見」の途上）を如實に示す資料として貴重である。以上が本書の概要である。

評者自身の感慨もこめて言えば、中國キリスト教史の研究は、日本の中國史研究においては決してメジャーとは言えない分野である。それでも近年、キリスト教傳道そのものへの關心からというのはもちろん、教育など關聯分野の研究のため、そして本書のような地域史の解明のためなど、さまざまな視點から中國のキリスト教に注目する研究者が増えつつある。宣教師が残した報告書などのいわゆるミッション史料を用いた研究も徐々にではあるが進んできている。本書はこうした日本における中國キリスト教史研究の流れをくみつつ、地域史という觀點から廣東地域につながる人々とキリスト教との關わりに光を當てようとしたものである。序章では先行研究をおもに「排外」「受容」「近代化」というキーワードで分類している。これは中國におけるキリスト教布教とそれを受け止めた中國社會の反應を表現する言葉としてこれまでの研究者たち自らが使ってきた言葉でもあり、分類の指標としては適切である。ただ、先行研究ひとつひとつをこれらのキーワードごとにカテゴリー化して整理する、という本書での手法が最善であったのか、という點には異論もあるかもしれない。管見では、本書が整理した先行研究の多くは「排外」と「受容」、「受容」と「近代化」というように複数のカテゴリーにまたがった研究成果だからである。ただ、それはそれとして、「協力」や「支持」というキーワードを用い、信徒だけではなく非信徒でありながら教會や宣教師と關わりをもった人々や、また「中國」の枠を超え、海外に移民した廣東出身者にも注目する視點は新鮮である。これまでの多くの研究では捨象されたり、あるいは全く別の問題として扱われてきたりしたことを「キリスト教地域史」という枠組みを用いることですくい上げ、新たな議論の展開を試みた點は評價されるべきであろう。

特に第二章で、ニュージールランドの廣州鄉村傳道團（CVM）の史料を用い、同會が傳道活動の一環として行ったニュージールランドと廣州近郊の間の私信と金錢送付の請負事業の實態を明らかにしたことの意義は大きい。本章では、C

V Mの具體的な傳道手法を明らかにするという課題に取り組みつつ、さらにこれを移民先と移民元の通信やネットワークの問題として、非信徒を含めて議論している。華僑社會の慈善事業としての運棺事業の衰退や、民間の通信事業が未發達であったことなど、當時の廣東とニュージールランドの往來・通信事情を踏まえたうえでの、C V Mの宣教師による送付請負事業が従來の通信手段の代替として機能した、との指摘はきわめて説得的である。一九世紀中期以降の中國人移民について、それぞれのローカルな社會のレベルで移民先と移民元の兩方に目配りをした研究というのは、史料的な制約もあり非常に難しい。だが本章を通して、ミッション史料や、本章で言えば伍徳明のような移民先の華僑研究者の研究成果などを用いることで、特に地域史という意味では新しい視角からの研究が可能であることが示されたとも言えよう。實際のところ、一九世紀の中國人移民に宣教師がさまざまな形で關與していたであろうことは、評者が研究していたバーゼル傳道會の例からもうかがえる。英領ガイアナ（現在のガイアナ共和国）や北ボルネオ（現在のマレーシアのサバ州）などに移民先政府の要望に應える形で、同會の宣教師が斡旋して集團移民が行われていたことが確認できるのである。廣東や福建は特に多くの移民を送り出した地域であり、移民先と移民元の人的ネットワークは、例えば本書三、四章における南洋での募金活動を通して示されたように、二〇世紀以降の地域社會の動きにも無視できない作用を及ぼす。本書では南洋における移民のキリスト教コミュニティについてはほとんど言及されていなかったが、鍾榮光や招觀海の募金活動を支えた南洋の華僑コミュニティも、ミッション史料を讀み込むことで再構成できるのかもしれない。この點は今後の研究の進展に期待したいところである。

いっぽう本書の第四章まではキリスト教界がその外側の「地域」と結んだなんらかの「關係性」を扱ってきたのに對し、第五、六章で取り上げられた梁發の「發見」は、一九二〇年代の廣東のクリスチャンたちによるキリスト教の立ち位置を向上（周縁から中心へと押し上げ）させる運動の一端として捉えられている。第五章におけるマクニールの『梁發傳』の版本に關する考察は、書誌學的にも興味深いものであった。『梁發傳』は廣範な史料を驅使して書かれた最初の本格的な

傳記であり、ミッシヨン史料にまで遡って研究することが困難な時期においては、中國キリスト教史研究者が梁發について言及する際、先行研究というよりはむしろ二次史料として用いることも多かった。だが一九三一年刊行の翻譯（中國語）版が（後年翻刻されたこともあって）廣く流布するにつれ、英語版は現存数が少なく、またアクセスも難しい。しかも英語版の刊行は一九三四年と中國語版より遅い。この本がいったいどのような経緯で刊行されたのか、評者は個人的には長年不可解に思っていたし、それゆえにまた二次史料として使うことにも抵抗感を覚えていた。本書第五章での考察は、この『梁發傳』の中國語版、英語版の刊行の経緯を可能な限り明らかにし、また版本ごとの内容の異同についても詳細な検討を加えている。刊行にいたる経緯においては、マクニールが梁發の子孫と接觸していたり、梁發の故郷での調査を行ったりしていることが指摘されているが、これは第六章での論点となる民國初期におけるキリスト教界の回顧（教會史における偉人の再発見）という視點にもつながる。マクニールにせよ翻譯者の胡簪雲にせよ梁發を顯彰するという意圖は概ね共通していたわけだが、第六章においてそれを廣東のキリスト教界の動向や「太平天國史」の形成とも關聯づけて論じ、當時の社會狀況の中に位置づけたことは、民國期のキリスト教の立ち位置を考えるうえで意義深い。

なお、太平天國史研究の側から附言しておけば、確かに現在では梁發が初期のプロテスタント中國人信徒にして傳道者であり、その著作『勸世良言』が洪秀全に多大な影響を與え、その影響のもとに太平天國運動が引き起こされた、ということは歴史「事實」として認識されている。ただ、この現在に續く認識が、本書で述べられたような民國初期の梁發の子孫やその縁者、また張祝齡による働きかけの直接的な影響と言えるかどうかは、議論の餘地があるのではないかと評者は感じている。というのも、梁發の『勸世良言』が洪秀全に影響を與えたという「事實」の根據は、現在ではハンバーグが一八五四年に香港で出版した *The Visions of Hung-Siu-Ishuen, and origin of the Kuang-si insurrection*（以下 *The Visions* と略稱）に集約されているからである。*The Visions* では、洪秀全の親戚で秀全をよく知る洪仁玕からの聞き書きとして、洪秀全が廣州で科擧を受験した際に『勸世良言』を入手し、後年それを讀んで自らの幻想體驗と結びつけながら



上帝信仰を創出していった経緯が述べられている。またハンバーグによる補足として『勸世良言』の著者梁發の経歴やこの書物の内容についても紹介されている。洪秀全に非常に近い人物の證言と、彼らと同時代を生きた宣教師の分析によって、洪秀全が梁發の『勸世良言』から直接影響を受けたことは一八五四年の時點で明らかにされていた。このハンバーグの書物は本書においては梁發の死後の評價の類型のひとつ、という文脈で取り上げられていたが（一九七〇―一九八頁）、以上のことを踏まえると、後世の研究書というより太平天國と同時代の二次史料と見るのが妥當だと評者は考えている。ただし、このハンバーグの書物が二〇世紀に入る頃には忘れ去られていたという本書の指摘もまた正しいだろう。だからこそ梁發は再発見されなければならず、その過程では、子孫による傳承や口述記録の掘り起こし、モリソンら當時の宣教師の記録の再發掘が同時並行的に起こり、その中で「事實」を探る試みが進められたのも事實である。本書巻末に収録された『基督教中國第一宣教師梁發先生傳』が興味深いのは、まさにそうした梁發発見の過程で現れたさまざまな言説を並列的に記録した書物でもあるからである。しかしその後、ハンバーグの書物をはじめとする太平天國關聯の文献の再發見が一九三〇年前後から進み、また本書でも指摘のあったように太平天國に對する見方そのものも變化したことで、「太平天國史研究」という分野が確立していった。この太平天國史研究の進展のなかで、同時代性や當事者性の高いハンバーグの *The Visions* の存在も再び廣く知られるようになり、その結果として、この「史料」の記載に基づく形で梁發を紹介してキリスト教と太平天國を結びつける言説が定式化されていったように思われる。

もちろん、梁發と太平天國を結びつける主張はすでに張祝齡が提起していたものであるので、それが太平天國史研究における梁發評價の形成に何らかの影響を及ぼしていたのではないかと、という問いは可能であるし、實際にそういう面はあったかもしれない。評者の私見では、學術的に太平天國史研究や辛亥革命史研究の成立に深く關わり、しかもそこにキリスト教との關わりという要素を加味したのは、本書にも時折登場する簡又文である。簡又文は一九三五年に *The Visions* の中國語譯『太平天國起義記』を出版し、また翌年には半月刊雜誌『逸經』を創刊してその中で盛んに太平天國に關する史料

の紹介や現地調査の記録などを掲載した。そしてこの『逸経』には張祝齡も父や祖父と太平天國との關係を證言する人物として複数回にわたり登場しているのである。簡又文が太平天國史研究を進める過程において、張祝齡は確かに極めて重要な證言者のひとりであった。少なくとも、張祝齡を通して彼の父祖たちと太平天國の關係が明らかになったことは（二〇七―二〇八頁）、簡又文が洪仁玕という太平天國とキリスト教をつなぐもうひとりの要の人物の足跡を明らかにしてゆくうえで重要な役割を果たしている。すなわち、教會の代表者として梁發や張彩廷など中國人キリスト教徒の先人を顯彰しようとしてきた張祝齡の運動を、學術界の側で受け止め、學説化するのに貢献したのが簡又文だったと言えるのではないだろうか。

ちなみに簡又文の父簡寅初はマレーシア華僑で、南洋で同盟會に加入した初期の人物のひとりであるという。本書第三章第三節に登場する嶺南大學の募金活動に應じた寄付者のひとり簡英甫とともに、南洋兄弟煙草公司が有限會社化を決めた株主總會（一九一八年）の保證人（知見人）を務め、また株主と董事（理事）にも名を聯ねる人物である。南洋兄弟煙草公司の經營を擔った簡兄弟（中心は長子照南と次子玉階で、英甫は末の弟）のいとこに當たるのではないかと思われる<sup>2)</sup>。また、本書第三章で一九〇〇年代に鍾榮光が行った募金活動の一つとしても挙げられている一九〇八年の中學の學生宿舍建設のための募金活動において、鍾榮光の傳記には代表的な寄付者として簡寅初の名前が擧がっている<sup>3)</sup>。この時の募金は在學生の保護者に對して寄付を募る形式であったようなので、そこから考えれば簡又文もこの時すでに嶺南學堂（本書では「嶺南大學」と總稱。一五頁）に在籍していたことであろう。嶺南大學の關係者、そしてキリスト教界に關わる人々のさまざまな働きかけ、という本書の第三章から第六章につながる議論に何かと關聯を持つてくる人物ではあるので、今後もし機會があるならば、簡寅初・又文父子にフォーカスする視點をつけ加えてみると、より重層的かつ關聯性のあるストーリーが見えてくるのかもしれない。

以上、太平天國史の立場から補足的なコメントを試みた。本書での議論が發展的に關聯してゆく分野は、おそらく太平

天國だけに限らず、いわゆるオーソドックスなミッション史に始まり、清佛戦争や辛亥革命、反キリスト教運動、北伐など多岐にわたると思われる。そのなかのミッション史との關聯でもう一點付け加えておけば、例えば第一章の廣州格致書院の設立を求める士紳からの嘆願書をめぐっては、本書ではおもに高等教育機關設置の提唱者であるノイズやヘンリーの報告書が、具體的な提言があつた時期（一八七〇年前後と一八八五年前後）を中心に参照されている。もちろんこれが、格致書院設立までの過程を士紳からの嘆願書もからめて描いてゆくという本章の構成にとつて、必要かつ有効なミッション史料の活用法であることは言うまでもない。ただ、本章を讀んだ限りでは、嘆願書に名を聯ねた士紳とアメリカ長老會ミッションの宣教師との關係がどのようなものだったのか、特に嘆願書に名前が擧がっているハッパーとの關係がどうであつたのかについて、あまりはつきりと見えてこない。宣教師の記録にはこうしたことに關する記載がそもそもない可能性もあるが、他方でもしかしたら、一八四〇年代から廣州で活動していたハッパーの記録をより長いスパンで丁寧に見てゆくと、彼が現地（廣州や香港）の人々と築いた人間關係が見えてくる可能性もあるように思う。だが、このような研究を二〇世紀が主な研究対象である筆者に貫徹するよう要求するのも理不盡であろう。研究する地域や時代が異なる研究者たちの間で協力しながら研究をすすめてゆく必要性も今後ますます高まってゆくと思われる。

他方で、本書の構成や内容からは、中國キリスト教史が關わる分野の廣がりがかつ同時に、それだけテーマが分散している（せざるを得ない）周縁性の高い分野であることも示されているように思う。結果的に、本書は非常にコンパクトではあるが、全體をつなぐテーマのようなものが（「周縁性」以外には）見えにくくなっているようにも感じられた。「キリスト教」や「嶺南大學」が重要なキーワードになっているもの、キリスト教や教會の活動、あるいは嶺南大學そのものについての系統的な敘述があまりなかったことがその一因かもしれない。ただ、本書が提示するさまざまな議論は、中國キリスト教地域史の可能性を示すものであることは疑いのないことである。本書をきっかけとして中國キリスト教史研究がさらに進展してゆくことを願つてやまない。

## 註

(1) 倉田明子『中國近代開港場とキリスト教』東京大學出版會、二〇一四年、二八四頁。

(2) 中國科學院上海經濟研究所ほか編『南洋兄弟煙草公司史料』上海人民出版社、一九五八年、一〇・一一・一五頁。簡照南兄弟が一九〇五年に創設した廣東南洋煙草公司は一九〇八年には經營不振から營業停止となったが、叔父の簡銘石が出資して一九〇九年に南洋兄弟煙草公司（無限會社）として再出發する。その際、九五%近い株式を簡照南兄弟と簡銘石の息子の孔昭とで均等に分配した（同上、三〜五頁）。一九一八年の有限會社化の際に寅初が株主として登場しているが、出資額では照南兄弟四人と孔昭、寅初

とでは半分ずつとなっていることから、おそらく孔昭と寅初は兄弟ではないかと推察される（同上、九〜一一頁）。  
 (3) Yang, Huar, Li, Ruming, Hill, Emily M, Chung Wing Kwong: *legendary educator in China's new learning*, Hong Kong: Commercial Press H. K. Ltd. 2011, p. 257. これは本書第三章で参照されている『鍾榮光先生傳』と同じものであるが、評者はこの二〇一一年刊行の英譯版（後半に中國語原版も收録）を参照した。該當箇所は「(四) 獻身嶺南學堂」の末尾にあたる。

一〇一七年六月 東京 東京大學出版會  
 一二糧 六十二七三十四頁 六、八〇〇圓十稅